

# 野に仏・里に仏

大谷 眞

第五回目の旅・その二

犬にほえられ、蜂に肝を冷やす

1994年10月16日  
晴れのち曇り

4時起床。カーテンの外はまだ真つ暗。隣の部屋に気を使いながら荷物をまとめる。昨夜洗濯したものは、何とか乾いていた。簡単に朝食をとり、今日のルートを確認していたら、空が白み始めた。6時には出発する。夜勤明けらしい係の人が、眠そうな顔で送り出してくれた。朝の国道を歩き始める。この瞬間がなんともすがすがしい。

今回、靴を変えてから随分歩きやすくなった。まめの心配も今のところ無さそうだ。ただ足にかかる負担は変わらない分、関節や筋の痛みは付いて回る。

国道から標識に沿って交差点を右折。ここから、観自在寺まで11キロ、とあった。集落を抜け、道は

上り坂となり、蛇行を繰り返しながら高度を上げた。やっとの思いで峠を越え、しばらく下るとまた集落に入った。さしかかった川を地図で確認しようとしていると、向かいから歩いて来られた婦人が、つっと寄って、

「あの、これお接待。ジュースでも飲んでください。」

と素早く五百円玉を手渡された。とっさのことで、お礼も満足に言えないまま、彼女はそそくさと立ち去っていかれた。いつもながら申し訳ない。しかし、だんだんお接待の金額が上がって来るのはなぜだろう？川にぶつかってから、「四国の道」の標識に沿って、土手の上の小道を歩いた。

ところで、四国全域にわたる主な標識には、「へんろみち保存協力会」に

よるものと、四国各県によって設置された「四国のみち」の二つがある。問題は、この二つのルートが、場所によって異なることがままあることだ。

前者は歩き遍路のための道であり、先人たちの足跡をたどる事を主旨としている。同時に、少しでも無駄な距離を省こうとする意図も感じられる。それに対し、「四国のみち」では、歩く楽しみに重点が置かれ、多少の遠回りをして、より自然とのかかわりあいを重視しているように思えた。新しく開発が進んだところでは、旧遍路みちは拡張され、車道と変わってしまふ。それでもこれが、本来の遍路みちには違いない。しかし「四国のみち」では、このような道はあえて避け、新たに自然の多いルートを指定しているケースがある。したがって、今日までは、この二つの標識を自分なりに選択して歩いて来た。ただ手持ちの地図は「へんろみち保存協力会」のものであり、「四国のみち」で迷うと、もうどうしようもない。ゆえに、この道を選

ぶときは、地図ではどの道を示しているのか、よく理解しておく必要があった。

土手をしばらく歩くと、川向こうに橋をはさんで、第四十番観自在寺の門が見えて来た。橋を渡って国道を横切り、境内に入ってお参りを済ませた。

観自在寺を出てから、あとはまた味気無い国道をひたすら歩く。途中にあった神社で一服し、今日の宿のことを考えた。次の第四十一番龍光寺まで四十番からは47キロ、ルートは二つ考えられる。

このまま国道56号線を進み、内海村から山越えのルートをとるか、あるいはそのまま海沿いに国道を進むかの二つだ。山越えをする前に泊まるには今日の距離が短かくなりすぎる。かといって、山越えの後では次の宿までは20キロほど先となる。これは少々きつい。海沿いの国道なら資料には二軒ほど宿の記載があるが、単調な国道はできれば避けたい。考えているうちに面倒くさくなり、まあいいか、山の中ならどこでも寝られるだろう、と

腹をくくる。

漁港らしい小さな湾のある集落で、山に向かう遍路みちの標識を見つけた。近くの食堂で、しっかりと腹ごしらえしてから歩き出す。地図上にある水場をあてにし、水筒は半分ほどにした。荷物を少しでも軽くしたい、との気持ちだった。

道はすぐに山道に変わり、あとはこれでもかと思えるほど急坂が続いた。登っても、登っても、同じペースで傾斜が続く。これにはまいった。

「柳水大師」と表示のあ



る祠の前で、やっと坂は一息ついた。この休息所を利用して、しばらく一服をした。しかし肝心の「沸き出している」と言う水場は、暑さのせいか涸れていた。この分だと次の水場もあてにはできない。

少し休んだ後、さらに登った。すぐに道はゆるやかとなり、後は長い尾根歩きとなった。次の水場「清水大師」もやはり涸れていた。仕方なくさらに歩く。しだいに道が下

りになり始めたところで、また次の休憩所があった。時刻は4時に近い。ここなら屋根もあるし、狭いながらベンチもある。今夜はここで泊まろうと決心する。

水筒の水が残り少なく、夕食はパンに果物だけですませた。寝る前に前回の教訓を生かし、夜露対策でポンチヨを利用する。ここには屋根はあるが、壁はベンチの背もたれ程度の高さしかない。その背に当たるところにポンチヨを広げてかぶせ、ベンチにもかけた。その下にできた三角形の空間に寝袋ごとく入り込む。こ

れで、準備万端。天気の下り坂なのが少々気になるのだが・・・。

10月17日 曇り時々小雨  
昨夜、複数の犬が鳴く声が、夜通し聞こえていた。この休息所のすぐ下に、どうやら民家があるらしい。犬は鳴くことが気晴らしなのか、鳴く自分の声に余計におびえるのか、延々と鳴き続けていた。そう言えば昔こんな犬がよく近所にいたものだ。

4時前に目が覚めた。犬の声は既に途絶えている。起き出して、静かに準備をする。残りわずかな水を沸かし、コーヒーを立てた。昨日は喉の渴きに苦しめられたが、これですっきりとした。

5時に出発。まだ真つ暗だ。ヘッドランプを頼りに道を下った。道にコスモスが咲き乱れ、どこが道で、どこが崖なのかはつきりしない。やはりすぐに左手に民家が現れたが、犬の声もせず、静まりかえっている。ほっとしながら家を回り込むようにさらに下った。山道が終わる、そこが人家の

庭先らしい、と気づいた瞬間、2匹の犬に鉢合わせした。一匹は左手の人家から、一匹は右上の畑から、まさに挟み撃ちとなった。急いで庭先を出ると、畑から犬が駆け降りて、もう一匹と並んで猛烈にほえる。とりあえず、挟み撃ちの態勢だけは避けられた。しかし、一匹はすぐ足元にまで接近し、歯を剥き出しにしている。すきあらば、ガブリときそうな気配だ。仕方なくヘッドランプで犬の目を眩惑し、杖を真つすぐ相手の鼻先に突き出した。犬はなお、その杖ギリギリのところまで、飛びかからんばかりにほえたてる。かわいそうだと思いつつ、杖で思いきり彼の鼻を突いてやった。効果てきめん、犬は弾かれたようにすつ飛んだ。しかしなおもほえる犬に、すきを見せぬよう後ずさりしながら、なんとかこの場を逃れた。しかし、肝を冷やした。

しばらく道を下ると集落に出た。とにかく真つ暗で、道がよく分からぬ。次々と分岐点が現われ、そのたびに迷ってし



まった。とにかく下る方向に進むことにする。川沿いに下る道ならそのうち国道に出るだろう、と進むが、予想していた距離感覚とどうも一致しない。結局、1時間以上も下って、ようやく国道に出た。既に夜は明けていた。

標識に沿ってこの国道を横切り、さらに集落を抜け、川沿いに作られた歩行者専用道を歩く。これが延々と続いた。小学生の集団登校に出会うと、「おはようございますー」と元気一杯、次々に声を

かけてくれる。思わずほほ笑みながら挨拶を交わす。田舎に行くほど、子供は元気だ。

津島の町に入り、途中で見つけた弁当屋で買い出しし、さらに進んだところで旧国道に入った。この手前で腰のかがんだおばあさんに声をかけられた。

「お遍路さん、少ないで悪いけど・・・。」

しっかりと手にしていた小銭の中から、彼女は震える手つきで百円玉を捜し出し、私に差し出された。合掌してから、ずだ袋

の中に、ポトンと落としてみたら。お礼の気持ちで、私の納札を差し出し、「私のお礼では、何もありませんがたみは無いですよ」が・・・。

と受け取っていただいた。「ほんとに、まだお若いのに・・・。」

彼女は大切そうにお札を収めながら、つぶやくように言われた。もう一度札を述べて彼女と分かれた。恐らく、何かを買われるつもりで、小銭を手にしてやって来られたのだろう、百円玉がなくなつた分、予定されていた買

い物は無事済まされたの  
だろうか？申し訳ない気  
持ちで一杯になる。

旧国道に入ってから、  
時々ダンプが通るだけの  
道をぐんぐん登った。峠  
に古いトンネルがあり、  
ダンプに冷や冷やさせら  
れながらこれを抜けた。こ  
こでお昼。

下ってから国道にまた  
合流したところで、電話  
を見つけ、宇和島に宿を  
確保した。今日は早いで  
切り上げることにする。

宇和島に入り、時間の  
早すぎるのを気にしつつ  
「ビジネスホテル白壁」へ  
チェックイン。

「ずっとお歩きなんです  
ね。」

対応してくれた奥さん  
が、私の姿を見てねぎ  
らってくれた。部屋に  
入ってすぐシャワーを浴  
び、その後で教えても  
らった近くのコインラン  
ドリーで上下を洗濯した。  
また汗で臭い始めていた  
ザックの肩ベルトも外し  
て洗う。乾燥機にほりこ  
んでおいて、宇和島のバ  
スセンターまで足を運び、  
明日夜の大阪行きの夜行  
バスを予約した。明日は  
5回目の最終日。今夜も

また8時には就寝。

10月18日 晴れ

4時起床。昨夜寝る前  
にあった頭痛はありがた  
いことに消えていた。た  
だしアスピリンのせいだ  
ろう、少し胃が痛んだ。

備え付けのポットで湯  
を沸かし、コーヒーの代  
わりにスープをつくる。

後は、無理やりパンを口  
に押し込んだ。今日の  
ルートを考えながら荷物  
をまとめ、6時前になっ  
て窓を開けてみた。空は  
少し白み始め、ひんやり  
とした空気があたりを包  
んでいた。

左手に折れ、さらに歩き、  
遍路石に沿って少し行く  
と第四十一番龍光寺だっ  
た。なぜか門前に鳥居が  
あった。納経所で記帳を  
お願いすると、いつもの  
ように「お姿」(ご本尊を  
描いた小さな絵札)をい  
ただけないので、  
「あの、お姿を・・・。」  
と言うと、  
「中にはさんであるで  
しょ！」  
と、ぴしりと言われた。い  
つの間にか手品のように  
はさまれていたらしい。

第四十二番仏木寺はこ  
こから3キロ足らずだっ

6時過ぎには出発。無  
人のフロントにキーを残  
して外に出た。56号線を  
しばらく進んでから、「北  
宇和島」駅辺りから標識  
に沿って県道に折れた。  
後はただひたすら歩く。  
道は次第に高度を上げ、  
やがて朝日が山の端から  
顔を出した。畑に植えら  
れた苗が、露を含んでキ  
ラキラと輝いている。あ  
ちこちでコスモスも可憐  
に花開いている。あえぎ  
つつ登りながら、そんな  
風景を楽しんだ。

「ドライヤーの熱は悪影響  
あり。」  
との張り紙があった。墨  
の色や、絹地の変色の原  
因になるとのこと。

坂を登りきった信号を

この後、齒長峠に向か  
う。空は青く、コスモスが  
道々に咲き乱れ、さほど  
汗もかかず、何やらうき



うきするようなところも

ちだ。うねうねと坂道を登る途中、軽トラックが横手でキュッと止った。何かな、と窓越しに中をうかがうと、三十歳代の女性が手招きしていた。

「乗ってかない?」

と微笑みながら言われる。場違いな程きれいな人でちょっとドキドキするものの、やはり丁寧にお断りする。手を振って走り去る車の後をまた歩き続ける。

しばらく行くと、車で  
のトンネル越えと、峠越えの  
の遍路道との分岐点に

出た。

「苦を選ぶか、楽を選ぶか、胸先三寸。」

と標識に書かれている。迷わず遍路道への階段を登った。登りきると、四国のみち」の休息所があり、露天にはテーブルのセツトも用意されていた。日差しもほどほどで、白衣を脱ぎ汗を飛ばす。

しばらくくつろいでから、荷物を整え、峠越えにかかった。いきなり45度の急坂となり、あえぎながら200メートルほど登り切ると、道はほぼ水平となった。送電線の鉄

塔の下に峠の標識があり、

横手にはブロックで作られた祠があった。何体かのお地藏様があり、お参りをしようと思いつき、お参りをして驚いた。何匹かのスズメバチがいきなり飛び出してきたのだ。ふと天井を見上げると、50センチほどの巨大な巣がぶら下がっている。あわてて後ずさりした。それから杖を忘れてきたことに気づき、またそろそろと近づいて、ひっつかむと、あとは一目散に逃げた。しかし驚いた!

ここから下り坂。あと

は黙々と下る。坂を下り切つて、崩れた小屋の横

手から県道に出た。少し行つた小さな大師堂でお参りをしていると、後ろから声をかける人がいる。振り向くと60歳ばかりの男性がほほ笑みながら立っていた。髭には白いものが混じり、昔ながらのキスリングのリュックには掛け軸が顔をのぞかせている。同じく歩き遍路だとすぐにわかつた。「五十で亡くなつた女房と一緒にね。」

昨年退職の後、ずっと心に暖めて来た妻の回向を願つての四国行脚だと言つ。照れ臭そつに、首にかけた奥さんの写真も見せてくれた。カードケースの中で、まだ若々しい婦人が静かにほほ笑んでいた。歩きながら話が弾んだ。

「ずっと通しでお歩きなんですか？」

「はい。一番さんから歩きだして、えーっと、確か、今日で20目めだと思ひますが……。」

歩いていると、まず曜日の感覚がなくなつていく。それから次は日にちの感覚と続く。

「足のまめはいかがですか？」

「始めはやっぱり苦労させられました。でもね、つまるところ、5本指の靴下、しかも薄手の靴下が私には一番いいみたです。」彼は道中は平服、お寺に着いてから白衣に改める、と言つ。そのほうが長旅では確かに快適かもしれない。

しばらく一緒に歩いて、ちよつとタバコを一服していきます、という彼と分かれた。彼も言うように、いろんな人と道連れになつても、やはり歩き通すには自分のペースを守らなければ続かない。一緒になつたり、また一人になつたり、なんとなく人生そのものと同じ様な気がする。

「この路地を抜けていくと近道ですよ。」

宇和町の町並みに入つてから、声をかけてくれた婦人の勧めでわき道に抜けたものの、どこで間違つたのか公園に迷ひ込んでしまった。ゲートボールの老人の団に出くわし、教えられるまま一般道に抜けた。ここで

さらに保険の勧誘員らしい婦人に道を請い、丁寧に明石寺への道を教えていただいた。

第四十三番明石寺門前には広い駐車場があり、遍路用品をそろえた食堂兼土産物屋もあつた。以前から欲しかった菅笠も見かけたが、大阪に帰る日とあつて今回もあきらめる事にした。

山門に入り、トイレを拝借し出てくると、先程の男性が追いついて来られたところだつた。彼はここで白衣に改め、二人してお参りした。立派な声でお経をあげられるのを横手で聞きながら、私は遠慮して口の中でもぐもぐと唱える。

あたりの写真を撮る私を残し、一足先に彼は納経所に向かう。一通り撮影を終わつて後を追つと、彼はご住職と楽しそうに話をしてるところだつた。

「車で回るのもなかなかのご時世に、いやあ、歩いて回られるとは、よほどの信心ですなあ。」

と、矛先が私にも向いたので、いやいや、単に歩いてみたかっただけ、とも

言いにいく、

「はぁ……。」  
と言葉を濁す。

先程の食堂で一服して  
いきます、と言う彼と、こ  
の先の互いの安全を祈り  
つつ別れ、宇和町の町に  
戻った。大阪行き之夜行  
バスの手続きをとり、こ  
の待合所を借り、平服に  
改めた。ここ  
で第五回目の  
「打ち止め」  
とする。

このあと、  
散髪屋を探し  
た。四国で散  
髪をするのが  
習慣のようにな  
っていた。  
出発時刻まで  
充分に時間は  
ある。

店を見つけ  
て中に入る  
と、主人らし

い老人は私の格好を見て、  
「お四国ですか？」  
とすぐに聞かれた。平服  
に戻っても、杖がすべて  
を語るらしい。

「私も十年ほど前、ほとん  
ど日帰りでまわらせても  
らいましたけど、いやぁ、  
お歩きとは、よっぽどの  
願かけでもされてますん

でしようなぁ……。」

「いえ、あの……。」  
ノーテンキに、歩きたい  
から歩いてます、とは  
やっぱり言いにくい。  
チヨキチヨキとハサミを  
使いながら、老人は続け  
る。

「しかし、なんですなぁ。  
おんなじお寺さんでも、

なぁ。」

そうそう、そのとつり、と  
うなずく。

散髪が終わり、シヤン  
プーになってご婦人に変  
わった。

「お若いのに、白いもん、  
けっこうありますねえ。」

「そんな、見てくれより若  
こうないですよ。」



栄えたはる所と、さびれ  
たまんまのお寺、感じ良  
いご住職に、感じ悪いお  
方と、いろいろお寺に  
よってありますわなぁ。

お四国まわられるお方  
は、皆、同じように、一つ  
一つお参りしていくはず  
やのに、何でそないな差  
ができよるんでしょう

彼女からすれば、多少  
の差こそあれ「若い人」な  
のかもしれない。

さっぱりとして店を出  
るとき、皆さんが、お気を出  
つけて、と送り出してく  
れた。一歩外に出ると、ひ  
やりと風が頭をなでた。  
すでに町は黄昏の中に  
あった。